

## 伝統の継承・確立

理事長 森

勉

私は、冷夏で稲が不作となり米を輸入した平成5年8月から6年7月の間、米所新潟県の新発田市で第30普通科連隊長を拝命した。連隊長は精強の誉れ高い陸軍第2師団(仙台)の隷下部隊であり、我々が戦史で学んだ重要な局面に度々登場する歩兵16聯隊の伝統を継承している素晴らしい郷土部隊であった。

陸軍の聯隊番号とその駐屯地が同一の陸自の連隊は、青森の5連隊、久居の33連隊、板妻の34連隊のみだと記憶している。新発田連隊も16聯隊を継承したかったようであるが16連隊は既に長崎県の大村市に駐屯していた。このため兄弟聯隊の歩兵30聯隊が新発田市近傍の村松に駐屯していたのでこれを獲得したと言うが、その真偽の程は定かでは無い。歩兵16聯隊の生存者の方々はもとより一般市民の皆様にも30連隊を歩兵16聯隊の後継連隊として認識して頂いている。

陸自は「戦」、「兵」等軍を連想させる漢字が使用できないため教範は『作戦要務令』を『野外令』、階級は「大・

中・少尉」を「1・2・3尉」その他「兵科」を「職種」、「歩兵」を「普通科」等と呼称している。また国際貢献活動等で海外に派遣された場合、陸自は軍隊として国際法の適用を受け他国の軍隊からも彼らと同様に軍隊として扱われるが、国内では「暴力装置」、「実力組織」等と揶揄される。安全保障の現場は優勝劣敗の原則のもと、勝てば官軍負ければ賊軍という苛酷なものであるにもかかわらず、まるでお伽話の世界である。

陸自は創隊時米陸軍の戦術・戦法、装備等で編成される一方、幹部として陸軍の元将校の人達が多く入隊され陸自の育成・発展に尽力された。明治維新の和魂洋才ではないが陸自は和魂米才である。しかしながら朝鮮戦争の混乱の中で生まれた陸自と敗戦の後解隊された陸軍の組織は直接的には継続していない。

またわが国を防衛する任務を持ちながら憲法上陸軍ではなく、かつ戦いの経験を持たない陸自にとって、陸軍の良き伝統を継承することは容易なことではない。

創隊から半世紀以上経過し国産の主要装備で編成され、元将校の先輩方も退官した今日、日米同盟の重要性を考慮しながらも陸自の特性に応じた自らの伝統が確立される時期ではなからうか。